

【第2分科会】「史」が語るまちづくり



コーディネーター ^{さとう かずひろ} 佐藤 和弘 氏 (株)地域総研代表取締役)

昭和 28 年、人吉市生まれ。熊本大学大学院自然科学研究科博士課程単位修得退学。
(株)三菱総合研究所嘱託研究員、(財)熊本開発研究センター専任研究員、熊本女子大学(現
熊本県立大学)生活科学部助手を経て、平成6年より現職。

住民参加による地域づくり、ワークショップ等計画手法を用いた参加型まちづくり
の実践を指導。熊本県公共事業再評価監視委員会委員、熊本県地域づくりコーディネーター等を務める。日本建築学会、日本都市計画学会、日本計画行政学会等の正
会員。



パネリスト ^{ふくかわ よしふみ} 福川 義文 氏 (青井阿蘇神社宮司)

昭和 39 年、人吉市上林町生まれ。國學院大學文学部神道学科卒業後、神奈川県平
塚八幡宮を経て、昭和 63 年 6 月青井阿蘇神社の神職となる。平成 16 年 8 月、同
神社の宮司就任。地元人吉の伝統文化にこだわり続け、自ら球磨神楽の笛の奏者で
あるとともに、子どもたちへの神楽や風習の伝承などの活動を行う。人吉市文化財
保護委員。

平成 4 年に、昭和 38 年度生まれの友人たちと地域づくりグループ「三八卯龍之会」
を結成し、タウン誌の編集等、地域貢献活動にも取り組んでいる。



パネリスト ^{みぞぐち こうじ} 溝口 幸治 氏 (青井阿蘇神社奉賛会事務局長)

昭和 45 年、人吉市北泉田町生まれ。熊本県立人吉高等学校卒業後、人吉商工会議
所に入所。平成 11 年 4 月、人吉市議会議員に初当選、翌 15 年 4 月には熊本県議
会議員に初当選し、現在に至る。

〈主な所属・役職〉

農林水産常任委員会・廃棄物対策特別委員会・川辺川問題特別委員会

人吉商工会議所青年部所属・(社)人吉青年会議所 監事

青井阿蘇神社奉賛会事務局長・九州相良疾風之會 ^{かぜのかい} 副会長



パネリスト ^{つるしま としひこ} 鶴嶋 俊彦 氏 (人吉城歴史館館長)

昭和 30 年、熊本市生まれ。駒澤大学大学院人文科学研究科地理学専攻修士課程修了。
昭和 62 年、人吉市職員として採用され、学芸員として人吉城跡、荒毛遺跡、願成寺
文書などの文化財調査に従事する。平成 14 年 4 月、新設された熊本大学大学院社会
文化科学研究科(後期3年博士課程)文化学専攻に入学(第1期生)。平成 17 年 3 月
25 日、同大学院修了し「文学博士」の学位を取得。現在、人吉市教育委員会文化財専
門員。平成 17 年 11 月から人吉城歴史館長を兼務している。

『地域づくり実践カレッジ in 人吉』

【第2分科会】

「史」が語るまちづくり

日 時：平成 18 年 11 月 22 日 (水) 9:00～10:30

会 場：青井阿蘇神社



司会 昨日、今日と大変お世話になっております。田舎のぜいたく、いかがだったでしょうか。本日の第2分科会「史」が語るまちづくりを始めさせていただきます。

本日は国土交通省大臣官房安原審議官、それから国土交通省都市・地域整備局地方整備課、嶋田課長補佐にご出席いただいております。

私、本日皆様方のお供をさせていただきます、人吉市役所秘書課の福山と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

早速、本日の予定を簡単に申し上げまして、パネルディスカッションの方に入らせていただきます。

9時から始めまして、大体1時間10分ほど、分科会パネルディスカッション、それからマイクロバスで移動いたしまして、人吉城歴史館、焼酎蔵、これを回りまして、そのあと昼食会場の人吉クラフトパークで昼食にいたしまして、こちらの方に1時20分に戻って来るという予定でございます。

それでは、早速パネルディスカッションを始めさせていただきます。コーディネーターの佐藤和弘さんです。

コーディネーター 佐藤 和弘 氏 皆様、おはようございます。これから、第2分科会「史」が語る

まちづくりについてシンポジウムを開催させていただきます。大変失礼ですが、座ったまま進行させていただきますので、よろしくお願いいたします。

今日は、『地域づくり実践カレッジ in 人吉』ということで、第2分科会は「史」が語るまちづくりというシンポジウムを開催することになりました。私の方から、皆様方の前にお座りになっておられますお三方のパネリストの方々を、簡単にご紹介したいと思います。

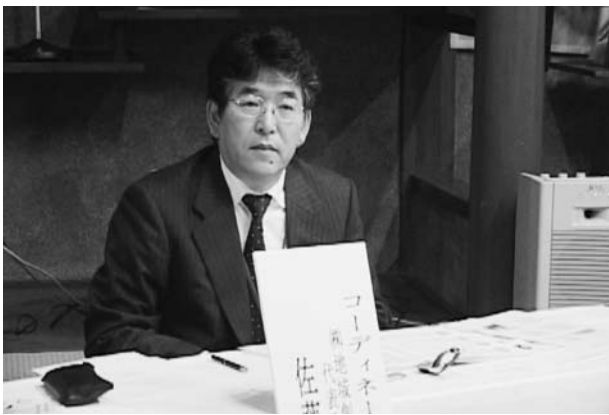
昨日から、この「地域づくり実践カレッジ」にご参加の方は、大会プログラムの10ページに分科会の方々のプロフィールが載っておりますので、こちらをご覧くださいと思います。

皆様方から向かって右側、一番右手の方に、鶴嶋俊彦さんです。拍手でお願いいたします。鶴嶋さんは、この中に書いてありますとおり熊本市生まれの方でございますが、現在は人吉市の職員であられまして、教育委員会文化財専門員としてご活躍のほか、市の職員として人吉市の歴史館の館長さんをお務めになっておられます。鶴嶋さんは、熊本大学の方でこの歴史の方をご専門にされて学位を取得されておられますので、さらに歴史の専門家でございますので、歴史の観点から人吉のいろんな思いを語っていただこうというふうに思います。

それから真ん中にお座りの方は、溝口幸治さんです。拍手でお願いいたします。溝口さんは、このプロフィールの中では青井阿蘇神社奉賛会事務局長となっておりますが、今日、会場を見渡しますと若い方もいらっしゃいますので、「奉賛会」とはいったい何だろうかということも含めて、後でちょっとお話していただきたいんですが、このプロフィールにありますように人吉市のお生まれで、商工会議所を経

まして市会議員、そしてお若いんですけども、このご当地区の県会議員さんでいらっしゃいます。日頃から、まちづくり、地域づくり、県議会の方でも私もたまに傍聴いたしますが、非常に若手の議員さんの中で一番張り切って地域づくり、そしていろんなご質問をなさる方です。政治家でございます。まちづくりという観点から、この歴史の語るまちづくりについてご意見をいただきたいというふうに思っています。よろしくお願いいたします。

それから、私のすぐ左手になりますけれども、福川義文さんです。よろしくお願いいたします。福川さんは、この青井阿蘇神社の宮司さんでございますが、人吉市のお生まれで、地域づくりの方にもかかわっておられます。このプロフィールを見ますと、「三八卯龍之会」でよろしいんですね。38年生まれの卯年、辰年生まれの方の会をつくっておられます。そのほか、前はタウン誌の編集ですとか、そういうようなことも取り組んでおられたということで、青井阿蘇神社の歴史はもとより、こういう、私たちが歴史を中心にしてまちづくりを考えるにはどうしたらいいのか、その辺のご意見等も賜りたいというふうに思いますので、よろしくお願いいたします。



最後になりましたが、私は本日のコーディネーターを務めます佐藤和弘と申します。どうぞよろしくお願いいたします。私事で恐縮ですが、実は私は、人吉市の中青井という、駅前ところに実家がございます、もう子どもの頃から阿蘇神社の青井さんで、通称、「青井さん」と私たちは呼んでおりますが、ずっと遊んでおりました。今まで私自身は、こういうまちづくりですとか自治体のお仕事、あるいはいろんな経営コンサルタントもやっておりますけれども、これまでを通して、神社でシンポジウムをするというのは初めてであります。後ろの方に父も来てるんですけども、親の顔を見なくても、

神社には必ず参って、「今日も一日よろしくお願ひします」というような生活をずっと送っております。今日のご縁がございまして、このような機会をいただきましたので本当に感謝いたしております。私の方が90分間、10時半まで、シンポジウムの進行を務めろということですけども、皆さん方のご協力なくしてはできませんので、どうかよろしくお願ひ申し上げます。

少し、この90分間の進め方をお話申し上げて、その後、足を崩しながら皆さんと一緒にシンポジウムを進めたいと思います。まず、お一方ずつ10分ぐらい、それぞれ「史」が語るまちづくりに関しての思い、とりわけご自分の活動に対してどんな取り組みをなさっているか、少しプロフィールを補う意味でも、そういうお話を10分ぐらいずつお伺いしたいと思います。合間に、もしかすると私が質問するかもしれません。基本的にお一方10分ずつぐらいお話していただいたあと、私がさらに、私は人吉市の人間なんですけれども、今熊本市におりますので、少し人吉市を離れております。そこで、今日の会場にお見えの方々、私の手元を見ますと、実は昨日から全国からお集まりなんですけれども、この会場には遠くは岩手県からお見えでございますし、群馬、山梨、富山、四国、その他たくさんの地域からお見えでございますので、人吉市のことを、むしろ私もあんまり知らないというような立場で質問していきます。そういう質問をしながら、おそらく歴史を通してまちづくりを進めていくにはどんなポイントが必要なのかということが、お話の中から出てくるんじゃないかなというふうに思っております。そういうキーワードを私の方が整理しながら、まちづくりに関して私たちの将来のビジョンのヒントになるものをいただけたらと思います。

また、全国からお見えでございますので、歴史というのはどこのまちにもあるわけですけども、おそらくそれぞれの地域でのまちづくりなどでお悩みの点、共通の点がたくさんあると思います。そのためにお出でいただいていると思いますので、少しでもその辺にお役に立つようなことができればというふうに考えております。

それから最後の方は、せっかくの機会ですので20分ぐらいは取りたいと思います。会場からご三方へのご質問、またご指名じゃなくてもいいんですが、質問を受けながらシンポジウムを進めていき

いというふうに思っております。

それでは、前置きが長くなりましたが、どうぞ会場の方々も足を崩してください。もしよろしければ、我々とお三方も、足を楽にさせていただきたいというふうに思います。

トップバッターは、鶴嶋さんをお願いしたいと思います。先ほど申し上げましたとおり、人吉城歴史館の館長でありますけれども、人吉城の研究だけではなくて、幅広くいろんな歴史のことも、歴史の深い形で、今日はせっかくよその地域からお見えなので、ちょっと小さいかもしれませんが前の方にスライドをご用意していただいております。鶴嶋さんの方から、思いの丈を少し話していただきたいと思います。それでは、よろしく願いいたします。

人吉城歴史館 館長 鶴嶋 俊彦 氏



トップバッターでやることになりました鶴嶋です。教育委員会の方で文化財を担当しておりまして、今日はプレゼンテーションをちょっと用意して来ましたので、それをもとに話を進めたいと思います。

本日、私の主題というのが、この「日本の名城人吉城」ということでありまして、それを人吉の市民と一緒に未来へ引き継いでいくという意志のもとに、お話をしていければと思います。

文化財保存のときに、ご存じのとおり世界中にあるわけですが、童門冬二さん流に言えば、「コミュニティ・アイデンティティー」、「地域特性」、その一つを構成するものでございます。人吉の方にどういう素材があるかというお話ですが、まずこれも昨日の童門さんのお話の中でしたが、鎌倉から相良氏という支配者がこの地域に根づきまして、そして明治維新まで統治者であり続けたわけです、670年間。「相良 700 年」と、普通平たく言いますが、その長い統治を経た地域であるということで、これはよそにないわけです。全くないわけでは

ね。お隣の鹿児島の方の島津さんも、同じような系図を持ったお武家さんですけども、島津さんの場合は点々と拠点を変えているわけですね。そして分家がいくつもありまして、その分家筋から統治者が出てくるというようなことですが、基本的に相良家は一貫して本家筋ですと統治を続けていたという家柄であります。その間は、いろいろ内乱とかが当然あるわけですが、相良の血を引き継いでいくことに主眼を注いで、その一統が明治維新までつないでいったということが特色です。それで、この特色が非常に地域文化の根幹にありまして、いろんな文化財を残している、あるいは文化を形づくっているということでございます。そこで、遺跡としてどんなものがあるか。

まず、居城であります「人吉城」ですね。あとで少し人吉城のお話もしたいと思いますが、そうしたお城。それからお墓があります。「相良家墓地」といいます。市内の「願成寺町」というお寺の名前をつけた町、町名がございますが、そこにお寺が、「願成寺」というお寺があります。そこが相良氏の菩提寺でありまして、その裏山に歴代の墓地が 250 ほどずっと並んで。現在は熊本県指定の史跡になっておりますが、そこを人吉城と並んで整備しているところがございます。もともと、この願成寺の相良家墓地のある場所は、相良氏の鎌倉時代の館跡だろうと推定されています。そのほか、例えば山越えして、隣の国に日向の国、大隅の国、薩摩の国の道路に、交通路のところには番所を置いてあったりとか、そういう遺跡が山の中に残っていることも最近の調査でわかっている。そういう、非常におもしろい場所でございます。

それから、「人吉」、「球磨」を古い言い方で言えば、「肥後の国の球磨郡」というところが、この相良氏の所領だったんですね。現在は人吉市と球磨郡の町村がございますが、その人吉・球磨は古典、古社寺建築の展示場だったというのが私の持論でありまして、これはどういう意味かと言うと、古い寺社仏閣が、この人吉球磨の盆地内に点々と残されております。具体的に言いますと、例えば国指定の文化財が熊本県に 10 件ございますが、その中の 9 件がこの人吉球磨にございます。それから、県指定の重要文化財が古社寺建築ですが、それも 8 件中 7 件がこの地域にあると。文化庁の表現を借りますれば、この人吉球磨は離島並みに、離島ですね、離れ小島です

けれども、そういうところと同じように、非常に何か建築技術が中世の時点でストップしている。中世の建築文化は、ずっと延々と江戸時代も継続されて残されているということで、現在国指定になっている重要文化財というのは、この青井阿蘇神社も含めまして大体中世の終わりから、それから江戸時代の初めの頃に集中していますが、そういう社寺建築がたくさん残されている。まだ未指定のものもございます、人吉に。文化庁、ちょっと今のところストップしていますが、まだ豊富な建築文化財がたくさんこの地区にあるということで、それを表現して「展示場」だと言っているわけです。

それから、これはちょっと時代をさかのぼりますが、この地域は『古事記』、『日本書紀』に出てきます「熊襲」という集団ですね。大和政権に反抗して末路ある人々ということをいわれていますが、「熊襲」の地域だというふうには私は考えておまして、この遺跡として、「地下式一体石築造」という非常に特殊なお墓があり、これは群集しておまして、この人吉球磨の人吉盆地と、それから山を越えた鹿児島県側の川内川流域、そういうところにしかないわけです。この日本列島の中でこの南九州山間部にしかない、そうしたお墓をつくっていた集団があったと。それは古墳時代の中頃、5世紀ぐらいなんですけど、おそらくこれは「熊襲」と呼ばれている人たちが残したお墓であろうというふうには私は想像しているんですけど、こうした古いときの歴史もあるんだということですね。

いつか洋酒メーカーの、経済界、財界のトップですか、「東北の熊襲は文化の程度が低い」というようなお話をされたことがあって、非常にバッシングを受けられたという記憶がありますが、「熊襲」は焼酎を飲んでおったということでございます。次に挙げたいのが、「焼酎王国」だったという、昨日も球磨焼酎がたくさん並んでいたと思いますが、この「焼酎王国」というふうには私が呼んでいます。これも文化財の一つではないかと、私はもう文化は一つだと考えてるんですけども、そういう歴史もあります。現在の焼酎で、国際ブランドにもこの「球磨焼酎」という名前がなったということでもあります。

それから、この無形文化財というのがこの地域ではまた相良文化の一つとして残されておまして、この青井阿蘇神社でも舞われますが、「球磨神楽」、それから「ウンスンかるた」といって、これは日本

の中でこの地域にしか遊び方が傳承されていなかったもんなんですね。「うんともすんとも言わない」ということばの語源になっていると言われているカルタ。要するにポルトガル語なんですけれども、トランプ遊びみたいなものですね。そういう遊び方が残されておまして、今こういう遊びも一所懸命傳承しようという方たちがおられます。それから、市長の話にちょっとあったかもしれませんが、「三十三観音めぐり」という観音さんがですね、お彼岸の春、秋のお彼岸に回る習慣がございます。こうしたものも文化財としても指定をしております。そのほか焼酎を飲むとき、江戸時代から遊んでおりました「球磨拳」というじゃんけんがございます。この拳で、数字で、1つ多いと勝ちになるというやつですね。6通りの出し方がございますが、そういう「球磨拳」という遊び方もございまして、これも今傳承がされております。こういう地域の遺産であるんだということございまして、この中で人吉城も一所懸命保存整備をしているというのが、私どもの仕事の一つの大きな柱なんですけど、人吉城は昭和36年に国指定の史跡となっておまして、随分、地形がシラス台地であったもんですから災害が多かった。その災害復旧工事の繰り返しを、ずっと、延々としておまして、一段落した時に、昭和59年の保存管理計画書を策定しまして、人吉城の正当な価値付けを行って整備事業をスタートしました。昭和60年からですね。どんな形でやるかということ、発掘調査ということでまず発掘調査をしていきながら、どういったお城だったかということをお返ししていくという作業が前提にあって、そしてそれを復元整備していくという事業でございます。ふるさとの象徴、それから心に記憶される風景づくりというふうには私はこの事業を考えているわけですが、要するに人吉城跡を史跡公園としてのセントラルパークとして、中央公園としてそれを目指すということでございます。その中で手掛けた事業で、平成5年に完成した事業ですが、これは櫓を2つ復元しました。これは発掘調査と、それから明治の初めまで残ったもんですから、その写真に基づいて復元したものです。櫓2棟。それから、長堀を150メートルほど復元しました。本日の、今回の大会プログラムの表紙になっています。この写真が、この復元された櫓、それから長堀という堀でございます。この復元の結果、復元しましたところ随分反響を呼びまして、いろんな

ところでポスターとか写真を使っていたかようになります。これぐらいから、人吉市民の方々の人吉城跡に対する考え方が、少しずつ変わってきたのかなあというふうに思うようになります。



また、熊本県の「景観賞」も受賞しまして、非常にこれには喜びがわくんですが、こうしたことを踏まえて、平成15年から「ふるさと歴史の広場事業」というんですけどスタートしまして、まず、人吉城のガイダンス施設として人吉城の歴史、文化、それから相良氏の歴史をまとめて説明する施設をつくらうということで、本日、この後、エクスカッションの中で最初に行きます、「人吉城歴史館」という施設をつくりました。これは昨年12月2日にオープンしまして、やがて1周年を迎えるということでございます。「やっと」と言いますか、2万人達成をついこの間したところでございますが、そういった施設です。

それから、以前は野球グラウンドとかがありまして、その跡地を「ふるさと歴史の広場」ということで、多目的広場に整備しているということでございます。それから、昨日会場から見たかもしれませんが、人吉城の一角にあります眺めがあった場所に、もう一つ、長さ60メートルぐらいですが、長堀の復元を現在工事中でございます。

それから、その長堀のすぐ脇の「水の手門跡」の周辺の整備をやると。また来年度には、「堀合門」という小さな門がございまして、その復元事業をやるということでございまして、基本的にはこの「ふるさと歴史の広場事業」は平成19年で、一応完了という計画でございます。

今年の4月6日で、人吉城が「日本百名城」に認定されているということでございます。

私どもの仕事は、これはエンドレス、終わりのない事業だということになっております。ちょっとお

時間が来ましたのでこの辺で終了したいと思います。

コーディネーター ありがとうございます。

鶴嶋さんの方から人吉城のみならず、最初の方は人吉球磨の文化や歴史のご紹介をいただいておりますが、実は皆様のテーブルの上に、鶴嶋さんが今日ご用意していただいたスライドがそのままあるんですが、今の説明はたった前半の3枚目で終わってるんですね。このままいきますと1時間以上かかりますので、少しこの後、またディスカッションの中で、鶴嶋さんが用意されているものをご紹介いただきたいと思います。

それでは続きまして、溝口さんをお願いしたいと思うんですけども、溝口さんの方は先ほどちょっとプロフィールのところで触れましたけれども、この神社の奉賛会の事務局長を務めておられまして、まちづくりだけでなく政治家としてもご活躍でございます。その辺のところも含めてお話しいたきたいと思っております。よろしく申し上げます。

青井阿蘇神社奉賛会 事務局長 溝口 幸治 氏



皆さん、おはようございます。ご紹介いただきました溝口です。私の時間を鶴嶋博士にあげてもいいなと思うぐらい、一所懸命資料を作られて来ておられますが、役目から、少しお話をさせていただきたいと思っております。人吉城の歴史については鶴嶋博士の方がお話をなさる、それから青井阿蘇神社の詳しい歴史については、隣に宮司がいらっしゃいますのでそちらにお任せをしたいと思います。事務局長もさせていただいておりますし、先ほど佐藤さんの方から県議会議員というご紹介もいただきました。そのあたりも少し触れさせていただいて、「奉賛会とは何か」というようなことについてもお話をさせていただきたいと思っております。

神社は一年間を通していろいろな祭りがございます。そういったものやっていたいただくのは「総代さ

ん」という方がいらっしゃって、「総代会」という組織がごさいます。神社本来の、いろいろなお仕事をなさる方たちでごさいます。私が担当しております「奉賛会」というのは、特に青井神社の中でも重要な祭の一つであります「おくんちまつり」。これは10月3日から10月11日までの間に行われますが、特に10月9日の「神幸行列」、こういった青井神社の一番大事なお祭りの部分を担うのが、この奉賛会でごさいます。どちらかというとな神事的な部分ではなくて、このおくんちまつりを利用していただいて地域を盛り上げよう、活性化しようという役目が、この奉賛会にはあるんだろうというふうに思っているところでごさいます。私は現在、奉賛会の事務局長をさせていただいておりますが、特に私が青井神社の歴史について詳しくたわけでもごさいませんし、日頃から敬神の念が深かったわけでもごさいませんでした。実は私は、商工会議所という所に職員として勤めておりました。皆さん方の地域でも商工会、あるいは商工会議所があると思いますが、地域の商工業を営む方々のお手伝いをしながら、まちづくり、地域づくりに励んでいくような仕事をさせていただいておりました。その仕事の途中で、「人吉に元気がない。もっと若い者がまちのことを真剣に考えて勉強をしようじゃないか。」ということで、「人吉の町を考える若者の会」という会が商工会議所の中に立ち上がりました。その時に、ちょうど福川宮司もその会に入って来られまして、お知り合いになりました。その中で、いろいろご指導いただくなかで、確か平成5年ぐらいだったと思いますが、人吉のまちを考える若者の会をしっかりとした組織にしようということで、商工会議所の「青年部」という組織に変更して活動を始めました。その時に、やっぱり一緒にずっと今までまちづくりのことを勉強してきたので、福川宮司から皆さんに、「おくんちまつりばちいった手伝えよ」、「自分たちの氏神様の祭りを、若い者が手伝わんでどうするか。」というふうなお話があって、渋々と言いますか仕方なくと言いますか、お手伝いを始めたのが、確か平成6年ぐらいからでごさいました。その中で会議に行って、いろいろと、若手ですからなかなかすぐにお仕事ができるわけじゃごさいませんので、言われることを淡々と行ってきたというのが当時の実情であったかと思ひます。そのうちに、福川宮司の発案で「継承部」というのをつくろう。継承部は「継承

していく」という継承ですね。継承部というのをつくろうということで設置していただいて、会議の中に参加させていただきました。当時は大体、60歳から80歳ぐらいの方たちが主なメンバーで、例えば60歳代の方が手を挙げて何かいい意見を言うと、上の人たち、80歳代の人たちが、「まだ若うしとって何ば言うか。最近神社に出て来とって何ば言うか。」と言って、80歳代の方が60歳ぐらいの人ば怒んなってすよね。そうすると、我々20代、30代は、会議の席ではしゅんとしてるほかないという状況でした。幸いにも、やっぱり80歳ぐらいの人たちからすると、我々20代、30代というのは、もう孫みたいなもんなんですね。何か直接怒られるのは通り越して、孫の世代というのは可愛いんでしょけど、本当に手取り足取り、「神社というところはこういうところで、こういったことに取り組んだらいいんだ。」というように、本当に優しく教えていただいたことを今思い出しております。そういった形で、ずっと継承部というものが発展をしてきました。私は商工会議所の職員でしたので、継承部の事務局的な担当をさせていただいて、その継承部には商工会議所の青年部とか地元で頑張る野球チームの方たちとか、今日は何人か当時私が声をかけたメンバーもいますけど、たまたま私が市議会議員にその後なっておりますので、市役所に入ってくる、まだ何もわからない若手の職員を、先入観がないうちに神社に引っ張って来て、「今年手伝え」って言うて連れてきたメンバーが今日何人かおりますけれども、そういった形で、若い人たちに神社のお手伝いをさせていただいたということがごさいました。

そうしているうちに、ここの神社本体の総代会長、奉賛会長という方がお亡くなりになられて、もともと私が勤めていた商工会議所の会頭だった方が神社の会長になられたわけですね。会長になられたもんですから、ちょうど神社の奉賛会の事務局長も、事務局長をされていた方がお辞めになるということで変更する時期が来ておりました。そこで会長からの命令で、「溝口は市議会議員で昼間は暇やろうで事務局長をせろ」というような形でご指名をいただいて、事務局長をさせていただいて今に至っております。

そのなかで、私たちがやってきた「奉賛会」というのは、さっき言ったように地元を盛り上げる、活性化する役目ですが、まず大きな仕事にお金集めが

ございます。人吉球磨の氏子の皆さん方から、「奉賛金」、そういったお金をいただいて財源にしていくという作業がございますので、そういった仕事にも取り組んできました。市の方から補助金等も、皆さん方も今もそうだと思いますが、当時行政は、特に政教分離の言い訳を使って、「こういった事業には加勢をしない」というような姿勢を行政は貫いておりました。それで、その「政教分離」という大義名分を上手にかいくぐりながら、行政からいかにお金を引き出して来るかっていうことに、宮司ともいろいろな知恵を絞って取り組んできました。幸い、昨日お話をされた人吉市長は、「政教分離なんて関係あるか」と、「地域が守り育ててきた伝統文化を、なぜ行政が支援できんとか。政教分離なんか関係ない。やれやれ。」と我々には言われるわけですね。それで我々も意を強くして役所の職員と折衝しますと、やはり担当者はそういうわけにいかんわけですね。いろいろなハンディーもありますから、非常に固いガードですが、そのなかで役所も知恵を絞ってお金を出してくれるというような姿勢が、今、行政とはそういう信頼関係のもとに、神社も運営させていただいております。



その奉賛会では、あとは地域の活性化という部分で、例えば今年の祭りなんかはできるだけ多くの方々に携わっていただくということで、焼酎組合とか焼酎組合の青年部、若い人たちに、「何とかおくんちまつりに合わせた事業をやってくれないか」ということでお願いしましたところ、人吉にある28の蔵元の醸造メーカーさんの若い方々が協力をし、後ほど出ていただければわかりますけど、相撲場がございしますが、ここで「焼酎大試飲会」というような催し物をしていただきました。そういった形で、できるだけ若い方たちに携わっていただくというようなことを奉賛会でも心掛けておりますし、

何より大事なことは、今までこの神社を守ってきていただいた、一所懸命やってきていただいた高齢者の方々、この人たちの意見をしっかりと聴くというのが実は大事だということに気付かせていただきました。やはり年をとられると、「もういらんこと言うまい。若い者に嫌われることは言うまい。」というような方もいらっしゃると思いますが、よく耳を傾けて聴くとやっぱり我々が知らないこと、そして参考になることをいろいろ教えていただきます。今は本当に若い人が体を動かして、年の人がいろいろ我々に指示をするというような体制ができ上がりつつあるのかなあというふうに思っております。

もう一つ、県議会議員の立場でお話をさせていただきましたと、これは市議会議員の頃からずっと市に対しても言ってきましたが、とにかく地域の氏神様、この青井阿蘇神社は我々の心の拠り所でもあるので、しっかり大事にしていこうという話をずっとさせていただいてきました。そのなかで、この青井阿蘇神社が、先ほど鶴嶋さんの話もありましたように人吉球磨の社寺建築では非常にシンボリックな社寺建築でございます。熊本県の社寺建築の文化財のうち、国指定重要文化財の9割は人吉球磨にございます。県の重要文化財でも8割はこの人吉球磨にございます。そういったものをずっと調べていくときに、「ぜひ国宝に指定してほしい」と、国の宝にですね。この熊本県には国宝というものはございません。国の重要文化財はございますが国宝はございませんので、ぜひこれを国宝にしてほしいということを県議会でお話させていただきました。これは何も私が勝手に発言したんじゃなくて、県の執行部や教育委員会といろいろ話したら、県も、実は国体が平成11年にあったときに、国宝になるものを探していたら青井神社が該当したと。しかし、もうちょっとのところまで国宝までいかなかったという経緯がありましたので、県もしっかり話をし、「ぜひこの青井神社を国宝指定にしてほしい」という運動を起こそうということで質問させていただきました。その時に文化庁からいただいた宿題は、「新たな価値づけ、新たな歴史的な発見が必要ですね。」ということと、地元の盛り上がり。我々にとっては空気みたいな存在ですが、やっぱり地元の方々が、もう一度青井神社のすばらしさというものを認識してほしいというような思いがあったんだろうと思いますが、「地元の盛り上がり」というテーマをいただきました。こ

の新たな価値づけというものについては、今人吉市で、「青井阿蘇神社調査委員会」というものを立ち上げていただいて、調査研究を進めていただいております。大学の教授、専門家の方々にも入っていただいて、今すばらしい研究がされておまして、近々その報告書もできるように聞いております。

また、地元の盛り上がりについては、今年ご鎮座から1200年の節目の年でございましたので、人吉球磨の多くの方々に携わっていただいているいろいろな形でこの祭りも盛り上がりましたし、来年に向けてもいいきっかけづくりができたと思っておりますので、こういった活動を続けていきたいと思っています。

誤解のないように言っておきますが、国宝指定ですから、例えば政治力でお願いをして国宝になるもんじゃないんですね。やっぱりちゃんとした歴史的な検証がなされて、価値づけがないなりません。私が言いたかったのは、「とにかく地元にある地域資源をもっと皆さんで認識して生かしましょうよ」と。何もないんじゃないんですよ。我々が生きているこの地域には、すばらしいものがたくさんあるんだと。そういったものを、みんなで一つの目標に向かっていく、そのきっかけをつくりたいという意味で質問しましたので、私が質問したからといって国宝になるはずはございません。あとは本当に、皆さん方の思いが国宝につながっていくんだろうというふうに思ってます。

ありがとうございました。

コーディネーター 溝口さんには後で質問をしたいと思ってるんですけども、今のお話の中に、私たちがまちづくりを考える上でのポイントがたくさんあったように思います。

一つは、伝承をきちっと年配の方から学んでいこうというお話がありました。それから、お金をどうするかというお話もありましたし、最後におっしゃいました、国宝にこれをするという活動を通しながらも、最後におっしゃったのが、「地域資源にいいものがいっぱいあるよ」と。

それをもっとみんなが知って、盛り上げていきたいというお話ですね。その場合に、どうしてもこれは人吉だけに限らず、少子高齢化が我が国でどんどん進んでいくので、人吉のまちなかを歩いていても本当に若い人が少ない。それは一つには、経済活動みたいなものも少し弱まってきているから、地方の抱える課題はどこでも同じだと思えるんですけど

も、そういうなかで、それだけ若い人たちを、こういう歴史を中心にして盛り上げていくための仕組みみたいなものがもし何かありましたら、後で教えていただきたいと思います。

それから、一番最初にお話しいただきました鶴嶋さんには、先ほど文化と歴史の紹介で、言ってみれば人吉城も含めて魅力がいっぱいあると。魅力を生かして、鶴嶋さんのお立場、実際に本物を復元していくというお立場の専門でございますけれども、そういう活動を通して一番の悩みは何なのか。それからそういう本物を探れば探るほど、どんどん深まっていくとは思いますが、実はそれとは別個に、今日のテーマであります、そういう本物をどんなふうにもちづくりに生かしたらいいのかなあと。そこを少しお話しいただければと思います。後でお尋ねいたします。

それでは3人目、福川さんですけども宮司さんでございますので、青井神社の歴史の紹介はもちろんしていただきたいんですが、今年は1200年祭をやって、相良藩が概ね700年続いているわけですけども、それ以前、400年ですね。相良藩が700年、それ以前の400年前から、実は青井阿蘇神社は続いてきているという、本当に歴史の古い神社だと思います。その宮司さんのお立場として、神社の紹介その他を聞かせてください。よろしく申し上げます。

青井阿蘇神社 宮司 福川 義文 氏



皆さん、おはようございます。ただ今ご紹介いただきました、この神社の宮司をいたしております。今日はこの神社におりまして、それをどう地域活性、そういったものに生かしていくかというようなこととお話をさせていただきたいというふうに思うわけでございます。普段は神様の方を向いて祝詞を上げたりしております。「あなたの祝詞は上手だなあ」というふうに言われますけれども、人様の前ではなかなか話し下手で

ございまして、今日もドキドキしながら何を話しているのかなというふうに思っているところでございます。

もともと神社の、父親はですね、神主ではないんですけども、代々ある神社の宮司をしてきた家のところに生まれまして今は宮司ですけども、子どもの頃から神様のご加護のもとに品行方正に育ったわけでもございませぬし、今、高齢者と言いますけれども、その当時、子どもの頃は、「何のそがんじいさんのしやるごたる仕事ばするきゃあ」というような話もしよったところでございます。

「神職の資格だけは取っとけ」というようなことで、大学の方にまいりましてその道に入ったわけでもございませぬけれども、卒業すれば何かほかのこともしようかなというふうに思ったりしました。でも、あんまりフラフラしているのもどうかというようなことがございまして、大学2年の時に、神社の方に住み込みしたんじゃないかと、させられたという方がいいかと思えますけれども、そこの神社の中で宮司さんたちと寝食を共にして、学校にも行ったというようなことでございまして。そのなかで、筑波大の村上和雄先生に言わせると、「遺伝子のスイッチがオンになった」と。サムシンググレートに気づいたというふうに私は思っているんですけども、その神社に寝起きをしながら、その宮司さんのお話を聴いたりお祭りに触れたりするうちに、「こら、じいさんに任せとかるごたる仕事じゃなかばい。これは、おいどんがごたつ若者がピシッとしていかんか。」というように思ひまして、大学を卒業して次のお宮さんにお世話になったりというようにことをしとったんですけども、昭和63年ですか、「こっちに戻ってこんね」というようなお話をいただきました。青井神社の方にお世話になるようになりました。もうかれこれ20年近くになります。そのなかで、帰って来た当時、若造で何も与えられない仕事もないもんですから、神社にあるような古い本とかそういったものを見ておったわけです。当時、人吉市に関する本とか歴史書とか、結構神社にあるんですね。そういったものに目を通しまして、改めて気づくことが多かったというのが実情です。そのなかで、今の子どもたちと一緒に、「人吉は何もなか、いっちゃんおもしろなか。」というようにことでずっと育って来たんですけども、実際はいろんなことがあったと。相良家が700年続いたと言いますけれども、一口に700年と言いますけれどもその

中にはいろんなことがあった。事件もあった。いいこともあった。そういったことを考えているうちに、ここはやっぱり奥が深いなあ。それと「球磨神楽」、そういったことを自分がやるようになって、例えば鳥肌が立つような思いをすると、見て感動してですね。これはやっぱり、ずっと続けていかんかあというように思ったというのが、最初の取っ掛かりかなというふうに思います。

そのなかで、祭りというものを通して、この地域のまちづくりという、何かできないだろうかというように思ひまして、先ほど県議からも言われましたけれども、若い者が一堂に会しましていろんな話をするなかで、「やはりこれは若いもんが受け継いで伝えていくということが大切なんだ」というように思ひまして、皆さん方と共に歩んでいこう、この祭りに携わっていこうというようにことに取り組んでまいりました。「年に1回の祭りにもぎわせきらんまちが何でにぎわうか」というようなことで、自分より年の若い人たちに発破を掛けましてやって来たわけでもございませぬ。そのなかで、この神社は806年、大同元年のご鎮座でございませぬので、2006年、平成18年には、1200年という節目の年が回ってくるというのは何年も前からわかっていたことです。そのなかで私の務めといたしまして、「何をやらんかあいかんか」というようなことで、この神社は先ほども言いましたように、市民にとっては空気でもございませぬ。お正月の初詣に行くと、それから子どもが生まれますから宮参りに行って、それから七五三に行くと厄払いに行くと、あつて当然のところでもございませぬ。そこがどういったところかなんていうことまで考える方はいませぬ。ですからその中の1200年の、歴史の一編を紐解いていくというのが私に課せられたことかなあというように思ひまして、ここにチラシなどもありますけれども、こういった100年前の写真、50年前の写真というようにものを載せさせていただいております。これはもともと神社にあったものでございませぬ、もっとたくさんあるんですけども、ほとんどの品々は私が古本屋を回ったりとか、インターネットを駆使して購入したというようにございませぬ。それとまた、この神社の社殿のことについては、いろんな本に記されておるものや年寄りの人たちのお話を聴いてまとめ上げていったというように、1200年を迎えるにあたっては準備をした。それと

並行して、あまり充実をしていなかった青井神社の1200年間の歴史というものを、いろんな本をもとに集めて歴史年表を作った。そして、「どなたからいろんな質問されてもすぐに受け答えができるように、それだけはしておこう。」というように、1200年というところで取り組んで来たところでございます。何年か前から、このお祭り、おくんちまつりは人吉球磨の技の伝承、心の継承というように形で取り組んできました。「技の伝承」、「心の継承」というのが、これは伝統と文化のことを私は言いたかったわけです。伝統というのは今までの人たちがずっと積み重ねてきた技、集大成、それと文化というのは、今までの人たちがずっと積み重ねて来た心の集大成だと。「よかことはよか。悪かことは悪か、すんな。」ということです。その集大成が文化だというふうにとらえまして、それを今から先もつなげていこうというように、「1200年の歴史と技の伝承・心の継承」というふうに取り組んできたわけでございます。

子どもたちによく話しますが、包丁があります。カッターナイフがあります。「このカッターナイフはこの形になるまではどこから始まったと思うね。石斧から始まっているんな形になって、もうちょっと便利にはでけんだらうか。」と。「いろんな人が知恵を絞って、そしてこのカッターナイフができととばい。だから便利よかろう。鉛筆も研がる。それから紙もサッと切れる。これが伝統ばい。それと文化というのは心の集大成ばい。」まあ、簡単に言うところですね。ですからこの人吉球磨という、自分たちが住んでいるところの伝統・文化、というものを確実に先輩たちから受け継いで、そして次の世代に伝えていくこと。このアイデンティティーがなくなってきている日本の中において、一つの独立した、球磨人吉という、「人吉はこういうもんなんですよ。球磨はこういうもんなんですよ。」と言える、いいものになるんじやなからうかなあというふうに思っているところでございます。

それで国宝の話も出ましたけれども、この神社のことにつきましては、この本殿から楼門まで一連の社殿が同時期に造られてそのまま存在しているというのが、第一に貴重なところだというふうに言われております。ただ私も、国宝になればいいなあと思えます。やはり「重要文化財」というよりも「国宝」というのが耳の聞こえがいいもんですから、やはり国宝がいいと思えます。でも、国宝になるかならん

かは私が決めることではございません。ですから、それは結果がどうなるかはわかりませんが、自分の地域には国宝を目指そうというようなものがあると。それから、この400年間、この社殿を守ってきてくれた人たちがおったというようなことが大事なんじゃないかなあというふうに、近頃は思うようになっております。この地域に住んでおった人たちがこの神社を大事にしてきたからこそ、この社殿は、今私たちが、「国宝にしてくれというような運動ができるというのは、この方々のお陰なんだなあ。」というようなことを思っているわけでございます。

祭りに関して言いますと、お祭りというのは大体、今はもうフェスティバルとかイベントとかそういったことがごちゃ混ぜになっておりますので、何か新しいもの、にぎわうもの、そういった方に目が行きがちです。ですがその中に、一人ぐらいは歴史に逆行する者がおってよかつじやなからうかというふうに思います。新たなことを言う人がいます。こういうふうにしたらどうかと言って来る人もいます。でもその中で、「いや昔からこういうわけで今こういうものがある」と、そこは踏まえて次につなげていけるようなことはないだらうかというようなことを、逆にこちらから提案させていただく。そのようななかでは、昔はどういったことがあったのか。何でそういう行事が作られたのか。そして、何で今までそれが絶えることなく伝承されて来たのかというようなことを話し合い、またはそういったことを考え、新しいことを考える人たちが古いことを認識した上で話を持っていくと、プラスになっていくんじやなからうかなあというように、また私一人ぐらいは新しいことばっかりに目を向けるんじやなくて、時代に逆行したところで、何と言いますか検察とまではいきませんが、それを深めていく必要があるんじやなからうかなあというふうに思います。



ここにポスターがありますけれども、「語り続ける物語」というふうなタイトルをつけまして、今年も1200年というお祭りに向けて取り組んでまいりました。神事の一つひとつをとっても語り続ける物語、イベントごとの一つひとつをとっても語り続ける物語というふうなことでございます。昨日の市長さんの話じゃないんですけれども、物語として言われておったので、物語をつくれれば市長も喜ぶかなあというふうにしたわけではございませんで、やはり何か古い獅子面といますか、江戸時代の獅子面が昭和の獅子面に対しまして物を言っておるといようなことでございます。「歴史に耳を傾けよう。先輩方のご意見に耳を傾けよう。そして新たなことに取り組んで行こう。」というように、私が技の伝承・心の継承とか、伝統・文化とか言っておったのは、語り続ける物語という、この一文に込めたわけでございますけれども、今でも、「近頃の獅子面はわからんなあ」といふようなことを言われる方がおられます。昔の獅子面をかぶった人たちです。「ああた、獅子面ていうとはもうちっと腰をかがめて、本当怖ろしかごとしかぶらんばならんと。」というようにございまして。新しくかぶる獅子面の方たちがそういったことに耳を傾けておれば、それはずつとつながっていくんじゃないかなと思います。

昨日懇親会の時に、「つぼん汁」というのを、汁物を食べられたかと思っておりますけれども、あれもお祭りの料理でございます。秋の収穫の時期に採れた野菜を神様に差し上げて、そしてその流れを人間がちょうだいして健康になろうというように料理でございます。これも黙ってうっちゃればなくなります。漬け物もおいしかったです。これも黙って誰も見向きもしなかったらなくなってしまいます。なくなってしまったら、後で、「自分の親たちが大体あんときでれつとしとらずに、ぴしゃつとばあちゃんから習うとればなくなつとらんと思うたい。」と言われないうにしなきゃいけないと。おくんちまつりなんかにしても、「あん時まちいとぴしゃつとじいさんから習つとればよかつたつじゃもん。親父どんがてれつとしとったもんだけん。」と言われないうに、私たちはしとかないかんといふふうにしてございまして。先ほどから鶴嶋さんの方から言われましたけれども、神楽を中心にこの祭りをやります。これは中世から伝わっておる神楽でございます。それと同時に、現在のフラダンスも

舞台でやっております。「神楽ありフラダンスあり。青井神社さんの式もおもしろかなあ。」と言われても、その時々のお祭りの営みが歴史をつくっていく。そしてフラダンスをする人たちは歴史を認識した上で、「自分たちは健康で頑張っていますよ」といふのを、神様に見せるためにやっておられるといふような流れのもとにやっております。

時代と時々のお祭りはいいです。そしてそれは、流行をやっていく人たちが過去のことからずっと考えた上に自分たちはやって、そしてそのやったことを次につなげていくといふような努力を、この頃は、この青井神社のおくんちまつりでは認識した上で皆さんがやっていただいていることを、私はうれしく思っております。

とりとめのない話になりましたけれども、私は祭りとお祭りに、おくんちまつりといふものを地域の活性化とか、そういったことにつなげていく一つのものにしたいといふようなことで、現在取り組んでおるところでございます。以上でございます。

コーディネーター ありがとうございます。伝統文化をきちっと守りながらやるというお話はとても大事だと思います。そういうことが今日のシンポジウムのテーマです。何かと云えば、新しいことやればそうでもないといふところを、先ほどの「技の伝承・心の継承」といふことばの中にあつたんですが、今、福川さんの話の中にも出ましたけれども、人吉球磨にはすばらしいのもあるんですけれども、言われてみて初めて気づく。特に、「空気みたいなものだ」とおっしゃいました。ということは、毎日同じ空気を吸ってますから、地元の人意外と知らないんじゃないかなあ。だからそうなってくると、これからはもっと地域に生きているものをさらに息づかせて、それで活用していかうと云うときは、気づかせるにはどうしたらいいだろうか。そこが大事。その具体的な走りとして、祭りを通してやってらっしゃると思いますが、地元の人こそがあまり知らないけれども、そこをどうやって気づいていただいて検証しながら楽しく繰り返していくのか、その辺が大きな課題だと思います。鶴嶋さんの方にちょっとお戻りいただきたいと思っておりますけれども、先ほど私がちょっと申し上げました、本物を復活、復元なさっているお立場で、何かお悩みの点、問題点、見越して将来あるとすればどんなことなのか。あるいは、それをまちづくりにつなげるポイントといふのはど

こが大事なのかということ。

鶴嶋 遺跡の整備ですね。人吉城の整備ですけれども、基本的にこれはテーマパークではありませんので、実際にどういった遺跡だったということは調査すればある程度のことはわかるんですね。それに



基づいてやっていくというのが、あくまでも、何と言いますか大事なポイントでございます。もちろんその文化庁というか「文化財保護法」の規制があるわけですね。その中でやっていくということで、そういうレールの中で考えていくわけですが、当然、文化財サイドだけじゃ整備ができない。要するに財源の問題でございますね。史跡、国の史跡ですから国の補助金をいただきます。人吉は今まで、人吉城に注ぎ込みましたのが20億円近い事業費なんですけど、その半額以上は国の補助を引いてございます。ただそれだけじゃ、やっぱり広大な史跡の整備というのはできないわけですね。まだ途中でですけどもできないわけです。ですからこれは全庁的に、やっぱりこういった大きな史跡を整備していくには全庁的な取り組みが必要ということで、以前から、平成元年ぐらいからずっと観光課サイドの事業等を取り組んでくれということで庁内をお願いしたり。あるいは、これは市長のお話の中にはちょっと昨日は出てこなかったかもしれませんが、人吉城の城内の樹種転換を、ずっと延々と、12～3年やってるんですけど、それも建設部サイドで城内の樹種転換事業をやっていただいて、やっと数年前から人吉城の紅葉が、一つのこの時期の名勝になるようにということで。そういう見方をたくさん、少ないとだめだということでございます。一定の成果が出てくれば、これからはほとんどうまく動いていくのかなあとというふうには私は楽観視しているんですけども。やっぱり本物で復元をしていかないと、将来的につぶれていく、生き残れないんだということですね。史実を基本スタンス

にしていくことが大事だということ。それは先ほど福川宮司の話の中にもありましたように、やっぱり先人の話を聴いていく。それから昔のことにこだわるというのは、やっぱり必要な私だと思います。

私も役所内で「奇人変人」というふうに言われるのは非常にこだわり深いということだろうと思いますが、それは別に私は悪いとも思わないし、やっぱりそのスタンスでこれからも生きていきたいなあと思います。

それから悩みとしては、やはり市民の関心が今一、なかなか盛り上がっていないところもあって、例えば市役所が人吉城歴史館の同じ敷地、隣の方にあるんですが、まだ市の職員で人吉城歴史館の方に足を運んだことがない者がいるということですね。まず足下から、そういったところを固めていきたいなあというふうに思っているところです。

コーディネーター 鶴嶋さん、ちょっと質問させていただきます。「市の職員の方がいかないかん」というのはもう当然のことなんですけど、例えば人吉城歴史館、遺跡の整備をなさっておられて、先ほどのことばの中に、観光課サイドとの取り組みということもちょっと言われました。市民の立場からすれば、そういう歴史や遺跡をどんどん整備していくのはもちろん大事なことなんですけど、それが例えば商売をやっている方にどうつながるのかということですね。これはまちづくりですから、まちづくりというのは、僕は今日よりも明日、市民が元気になること、明日よりもあさって日元気になること。そうするとやっぱり、歴史はとても大事とみんなわかっているけど、みんな毎日食うことで一所懸命になって、その場合、これはあえて市の職員でもあられますから聞きますが、観光と連携することがとても大事だと思うんですよ。どんなことを、今お考えなのか。あるいはどの辺のところを仕組みれば、市のまちなかとお城がつながるのか、その辺で何かお考えのところがありますか。

鶴嶋 一番不得手なところを突かれました。私、教育委員会にはもう20数年おりました、よくわからないんですが。やっぱり、やり方としては主流ルートみたいな、それを考えていく必要があるだろうと。例えば、昨日のガーデン諏訪（旧中津留美術館）というのは、市の教育委員会の所有についてこの間あったばかりで、土地と建物を購入しました。あの場所をこれからどういうふうを活用していくかという

のが非常に大きなテーマで、私どもの仕事になるんですけれども。城内、それからそういうガーデン諏訪、それから中心商店街、また、今度平成19年度秋にできます、球磨川の方に新しい橋。そうしたものをつくれば非常に主要ルートができますので、お出でた観光客にそこを歩いてもらいながら、人吉の歴史、それから与謝野晶子、山頭火、田山花袋といった文人たちも来ていますし、地元の偉人たちの生家などもあります。また、日本で最初に飛行機によるフライトをした日野熊蔵という人も、人吉の出身です。そうした人たちの顕彰も含めて、そういうルートづくりというのはこれからの急務な課題であると思います。

コーディネーター ポイントポイントをつなぎながら、ルートを、いろんなルートを組み合わせていくっていうのが一つのやり方だろう。おそらくその中にも、行っては見ただけでも誰も説明する人がいなかったとかですね。そういうところも、多分これは人吉を事例に言ってるんじゃないで、例えば九州の中でもいいまちがたくさんあると思います。例えば私の好きな場所では、唐津だとか臼杵だとかですね。それから大分の日田ですね。いっぱいありますけれども、やっぱりどこも同じような方が考えて、そこにどうやって息遣いがわかるような仕掛けができるかっていうのは、これは市民の応援の仕方にもよってくるわけですね。

2番目の質問ですけれども、今度は溝口さんの方にお話ししたいと思うんですけれども、先ほどちょっと申し上げましたが、若い人を呼び込むにはどがんしたらいいかということ。その辺をちょっと、今回溝口さんをお願いします。

溝口 私は今36ですけど、若い頃から決して地域づくりに造詣が深かったとか一所懸命やっていたわけじゃなくて、実は今日、私をこの道に引っ張り込んでいただいた先輩が後ろの方に数名座っていらっしゃるんですが、今日は行政の方々が多いいですけれども、民間レベルの地域づくりシンポジウムとか勉強会とか交流会は結構ありましたね。ここ20年ぐらいの間にたくさんあったと思います。そういったものに私はよく連れて行かれてました。嫌で嫌でたまりませんでした、実は。そういうところに行くのが嫌だし、「何で俺に声掛くつとかな」と思いながらですね。嫌でしたけど、日頃からお酒を飲んだり仲良くさせていただいているということで

行ってましたが、行ってるうちにだんだんこういう人たちも全国にはいるのか、こういう考え方の人もいるのかということで、少しずつ刺激をいただきました。地元に戻って、私は商工会議所ってところにおりましたけど、「一生ここで生きて住んでいくんだから、やっぱりちったあ真剣に自分のまちのことを考えないかん。」ということで、何かだんだん一所懸命になったんですが、今私が心がけているのは、「自分がいいと思ったらだましてでも連れて行く」というようなことで取り組んでいます。とにかく若い人たちはきっかけがないんですよ。そういうきっかけがないので、だましてでも連れて行く。自分がいいと思ったらそれぐらいのことやっています。それから、日頃からの、やっぱりそういう時にはつきあいなんです。若い人たちにもいろいろ悩みがあります。相談もあります。それを真摯に受け止めて答えてやる。そういうことの繰り返しから、やはりそういったときに、「おい行くぞ。黙ってついてけ。」と言うたときについてくる人間関係ができるというふうに思っていますので、そういった活動を心がけてます。

たまたまこの若い人が盛り上がっているのは、一番始めは人吉商工会議所青年部というのが先駆者的に引っ張ってまいりました。そこに宮司の同級生の三八卯龍之会とか、私が入っている野球チームとか役所の若手だとか、そういった人たちがいました。今は、青年会議所とか各グループの若手はこの継承部の中に入れてしまうと。神社本体の奉賛会は、やっぱり高齢者の方が多いので、少し神社のことというのは年寄りがやるんじゃないかというふうに思われがちなので、直接はみんな飛び込んで来れません。しかしこの継承部というのを作ることによって、「継承部は若っかもんで頑張りよつとよ」「ここに来て少し勉強してみよう、みんなで楽しもう。焼酎ば飲んでみよう。」というぐらいのスタンスで、この継承部という窓口がありますので、ひょっとしたらこの継承部というのを作ったことが、若い人が入りやすいきっかけになってるのかなあというふうに思っています。

コーディネーター 継承部というのは、さっきお話ししました広めていくという意味ですね。つなげて継承して行くということですね。そうするとちょっとお尋ねしますけれども、今それを立ち上げられて、自分たちの活動の中に実際若い人が入って増えてき

ておりますか。先ほど溝口さんは、「自分がいいと思った者は、引っ張ってでも、だましてでも連れて行く。」とおっしゃいましたけれども、例えば若い人はどんな気持ちで最初に相談に行くんですか。あるいは、「こいつを入れよう」とか、いろんなケースがあると思いますけれども。おそらくいろんなところで地域づくりをやるときに、よく「人づくり」だとか、第1分科会は多分「人」のことでやっていると思いますが、「こいつは感性もいいし、地域づくりやまちづくりにぜひ頑張ってもらいたいな。」と言ったときに、「だましてでも」とおっしゃいましたけど、実際にはどんなふうになさっていますか。

溝口 大体こういう時期ですから、一所懸命やっているメンバーというのはダブるんですね。神社の祭りのことだけやってるんじゃないくて、例えば今日、「人」の方で話をしています鳥越というのが九州相良疾風之会会長ですけれども、人力車を引いているグループがありますが、前会長の松田さんも今日お見えですけれども、そういう人たちとダブるんですね。そういうグループはダブりますので、やっぱりメンバーは、人力車引く時には人力車に行くけど、祭りの時は祭りに行くという感じですから、その中でどんどん渦の中に巻き込んでいくというか、そういうイメージです。

コーディネーター そうするといろんな会があっても、実際やっている人はもう大体役がダブっている。そういう意味でも一つの会にしていた方がいいのかなと。そういう時期に来ているんじゃないかっていうお話しですね。わかりました。

それでは、ちょっと福川さんの方にお尋ねいたします。何か意地悪な質問しませんが、実は私、8年前に阿蘇市の阿蘇神社をどうやって観光につなげるかっていうので、これは先ほどおっしゃったようにちょっと新しいものに取り組もうということで、楼門の所で有名なジャズバンドを呼びまして、それで楼門の前でジャズをやった仕掛け人の一人なんです。そのときに、宮総代の方とか氏子さんたちとお話しして、「宮司さんはオッケーだ」と。しかし宮総代さんの方がえらい怒られました。そういう古い歴史のあるところで、「ジャズて何や」ということですね。だけでもさっきのお話を聴くと、文化をどんどん継承していく、このパンフレットにあるように古い獅子面が平成の獅子面につながりということですから、きっと文化の継承場所なんです。

ということは、その時代その時代で、神社とか、あるいは今日は出てませんがお寺とかは、文化を継承する一番モダンなところなんじゃないかなと。だから、モダンなところだからモダンジャズやって何が悪いですかという、そういう論理で。いろんな人が来て、まず、先ほどの溝口さんの言ったようにまず引き込むと。ジャズの好きな人だったらそこから入ってもいいじゃないかという考えですね。これは、こういう考え方は邪道でしょうか。ちょっとその辺を、先ほどの話からいくと古いものをきちっとするという事なので、どうなんでしょう。

福川 邪道とか、そういうことは私も思いませんけれども、まず「社会」ということばがありますよね、地域社会とか。社会ということばは「社」で「会」と書きますね。「お宮で会う」と。今はコミュニティーセンターとか公民館とかいろいろあるでしょうけれども、もともと何か地域の決めごとをする時は神社に寄って来ておったと。それで、つまらない話をする人も、神様の前ではあんまりつまないことも言わずに話も決まっておったのかなあというふうに思います。そのように地域というものが、成り立ちとか今後どうして行こうかというようなことを話し合ってきたところが、やっぱり神社だったんじゃないかなというふうに思うわけがございます。そのなかで私もいろんな相談受けたりして、こういうことをやりたいとか、楼門の前でやりたいとか神楽でやりたいというような話を聞きます。あんまり詳しく聞くと制御をせにゃいかんということも出てきますもんですから、「やんなっせ、やんなっせ。」ぐらいのところでは話をするんですけども、後で、「まさかあぎゃんとまですっとは思わんやったもんだけんあ」というような申し開きをすることもあります。ただ、それで一つ私が言っているのは、「神社で、何か境内でやる時には参加料は取んなよと。」ということです。「こん人たちは金払うたけん見すっばってんが、こん人たちは払うたらんけんが見せられん。」とか「そういうところじゃなかばい。神社というところは誰でも足を踏み込むところだけんが、何かイベントを知らずに来たっていう人もおると。だけんがそういうとき誰もがちょうどたまたま行ったばってんが、そういうことがありよったけんよかったと思えるようなことにしてくだっせよ。」というような話はしたりします。今の質問はそういう形でよございますかね。



それから地域、何か先ほどもちょっと言いたかったんですけど、皆さん、10円玉の裏側は何かわかりますか。「平等院鳳凰堂」とか5円玉が稲穂とか、100円玉は桜とかありますでしょう。1円玉は何かわかりますか。1年玉はわからないでしょう。楼門の前に「小賀玉の木」というのがあるんですよ。「小賀玉の木」というのは、もともと「招霊木」と書いて「神様がおりて来る木」というと言われておったらしいんですけども、ただ立っている木ですよ。神社にはつきもの木です。つきもの木なんですけれども、そこに看板を1個作りまして、1円玉に記されている木です。ただ、「この木をデザインしたらしいですよ」と掛けたんですよ。でも、それが一番にぎわってますよ、今観光客に。バスガイドが来て、「これ皆さん知っておられますか。1円玉の木なんですよ」と言ったら、皆さん「はあっ」っていうふうにそこら辺に1円玉を置いていかれる。何かお金だからあれかなあと思ってそこに壺を置いてたら、すぐにいっぱいになるぐらい置いていかれますね。何かちょっとしたことに光を当てるといいですか、再認識させるというのが大事なんじゃないかなあというふうに思います。おくんちまつりの行列をするときに、発輦祭（はつれんさい）というお祭りをする。このお祭りは、これから御輦を出す前に、「これから御輦を出します。無事に行って帰って来られますように。」というようなお祭りなんですけれども、もともと10年ぐらい前までは5、6人でやってたんですよ。そして時間が来たらみんなで出て行くというようなことをやっておったんですけども、横に置いてお祭りをやっていた御神輦を正面に持ってきて、大々的にやるようになりました。いつも10時半の出発ですから、「9時半か10時頃まで着替えて来てくれればよかよ」と皆さんに言うとしたのが、今では、「8時半には着替えて来てください」と言っ

ています。もともとは20分で終わってた祭りが今2時間かかります。でも今は、この境内は行ったり来たりできないぐらい人がいます。ですから、本来あるようなことを労を惜しまないでやれば、それは皆さん方のご協力も必要です。30分前に来ればよかったのが2時間も前に来なけりゃ、着替えて来なきゃいけないんですから大変ですけども、本来あるような姿に戻してやって、労を惜しまないでやればそれだけ人の注目を集めると。それがこの一つ目の目玉にこの頃なってきた、こういった写真コンテストをやりましても、ただ風景の写真が結構ありますので、近頃は。「これも青井さんの一つの名物になってきたなあ」というふうにも思っているところです。

コーディネーター ありがとうございます。ちょっと私の方が、あえて意地悪な質問したんですけども、今お話があったように本来あるようなことを労を惜しまずやればというその課程には、「もともと価値のあるものだからそのところをちょっと露払いしてやればきっと大丈夫だよ」と。その露払いのところを労を惜しまずにとおっしゃってるわけですね。

残りがあと15、6分になりました。冒頭に申し上げましたように、会場からも質問があると思いますので、そのほか質問のあられる方から挙手していただけますか。あちこちから、全国から来ていただきました。そちらの若い方、恐れ入りますが出身地とお名前をおっしゃっていただいて、ご質問お願いしたいんですが。よろしくお願いします。



参加者 富山県高岡市の高田と申します。よろしくお願いします。実は我が市も、日本の百名城に選ばれた「高岡城」というのがあります。高岡城はこの青井阿蘇神社の建造物と奇しくも同じで、慶長14年に建築されております。ただ、元和元年の一国一城令で建造物の方がすべて取り壊しになりまして、現在石垣と堀が残っている状態なんですね。

それから平成 21 年が高岡開城 400 年ということで、加賀藩前田家の第 2 代藩主利長が籠城しておったんですけど、平成 21 年度に開城 400 年の事業をやるということ、今やっています。その中の主要な事業として、市民の方から、「せめて天守閣を復元できないか」という声が上がっております。

そこで鶴嶋先生にちょっとお聞きしたいんですけども、この表紙にある櫓とか塀を復元されたということ、冒頭でちょっとおっしゃいましたが、この櫓について、何か立面図とか原図が残っていたんでしょうか。例えば高岡の場合は、「縄張り図」と言いますか平面図しかないわけですね。それにこのような立面図が一切残っていないんですよ。ずっと調査はしてるんですけど。それで例えば、何と言いますか図面にも残さないような復元をしていいものかどうか、非常に議論が分かれております。この史跡に基づく補助をもらって、または建造物サイドでは全然評価しないんじゃないかという気がします、文化庁で。その辺の兼ね合いと言いますか、何を基にこれを復元されて、当然これにも補助が入っていると思うんですけども。どのような考えで復元されたのかをちょっとお聞きしたい。

コーディネーター ありがとうございます。高岡市の方ですね。

鶴嶋 高岡城は国の指定の史跡ですか。

参加者 いや、現在県指定です。

鶴嶋 県指定ですね。この表紙にあります復元物は、これは平成 3 年から足かけ 3 年で 3 年間かかりました。足かけ算ですね。なぜ長くかかったかという、やっぱり本物志向でやりました。要するに土塀ですから、土で造ってありますね。非常に乾燥に時間がかかるということ、時間がかかったんですが、コンクリートとかを使わずに、昔の材料、それから昔の技術でつくるということを前提にしております。そしてその復元の根拠となったのは、まずは明治の初めまで残っておりまして写真がございまして、その写真で外観がわかるわけですね。それと発掘しますと、大体その大きさ、間取りがわかります。そういうものを資料に、文化庁の方に交渉したわけですけども、これもいきなり、「来年度からやらせてください」ということじゃありませんでした。

まず、昭和 59 年度に作りました保存管理計画書で復元をやるという方針を決めまして、それからずっと交渉ですね。もちろん交渉するたびに歴史的

な資料集めとかをやりましたけれども。私どもの場合は図面はございませんでしたが写真がございましたので、確実に明治の初めまでこういう姿で残っていたというのが実証できているということで、交渉の過程で復元が可能になっていったわけですね。それから財源は、これは文化庁の補助ではなく、私どもは起債事業でやりまして、熊本県からですね。500 万円だけだったですけども助成金をいただいております。そういった事業でございましたが、何ぶん、天守閣がないのが人吉城の特徴でございます。中世から続いた城ですので、天守閣はいらぬんですね。別な観点で人吉城は機能しておりましたので。でも何かこう、「人吉城にお城としての建物もほしい」という要望がありましたので、まずこの櫓 2 棟と長塀を復元したんですね。その効果は非常に絶大で、市民の人たちが人吉城にまず目を向けてくれるようになったというところがあって、これ自体は非常によかったなあと思っています。県指定の史跡であっても、やはり先ほど申しましたように本物志向でやらないとやっぱり飽きられるとか、時間を経過すれば人々の記憶からなくなっていくということがありますので、できるだけ史実に近い形を模索していきながらやられるというのが、一番事業としても効果が高いのかなあというふうに思います。

参加者 櫓も写真が残っていますか。

鶴嶋 ええ。これは、ほとんど同じ櫓の写真が残っています。

参加者 櫓は修理なんですか。

鶴嶋 これは明治まで、明治の 5 年ぐらいまで残ってたんです。その時に撮影された写真があります。それから払い下げになっています。解体されます。これはどこも同じと思うんですけどね。

コーディネーター ありがとうございます。また詳しくお聞きになりたいと思いますけど、この後、また鶴嶋さんを個人的につかまえてお尋ねいただければと思います。

ほかにご質問のある方がいらっしゃると思いますので、どうぞ遠慮なく。お二人いらっしゃいますので、後ろの方の方からご質問をどうぞ。先ほどと同じように、ご出身とお名前からお願いいたします。

参加者 熊本県の玉名市からまいりました。よろしくお願ひします。福島と申します。私どもの市も、あんまり有名な文化財とかそういうものはございませんけれども、ただ問題点がございまして。どこに

でもある問題だと思んですけれども、商店街が、やはり郊外店ができて人が行かなくなっている。売上げが落ちているということですね。いつの間にかシャッター通りになっているというのが現状でございます。そこでちょっとお伺いしたいのが、今のお話で、こちらの神社を使われて人が集まってやられているというふうなお話だったんですけれども、実際に人が集まって活性化が進んでいくかと思うんですけれども、現実には商店街の方にお金が落ちているのかということですね。やはり商店をされている経営者の方から言わせれば、お金が落ちてもらわないと、人がただ集まっただけではということをよく言われます。玉名市も、実は何と言いますか県北でございますので、県北のルートには入らせていただいているんですけれども、実際、例えば玉名、うちの場合は通過点というふうな形なんです。ということは温泉もありますし宿泊施設もあるんですけれども、目玉もありますけれども、結局そこは通り抜けられて、最終的には阿蘇とかそういうところでお金が落ちているという現状でございますので、現実には人が集まってどのような活性化をされているのかということをお尋ねしたいと思います。

コーディネーター どなたかご指名ございますか。なければ溝口さん。

溝口 ありがとうございます。まず、商店街にお金が落ちる仕組みは、個々の店主が考えることというのが大前提であると思います。例えばおくんちまつりの場合は、もともとこの奉賛会の成り立ちは、まさに商店街の方たちが自分たちの商店街を活性化するために、何とか神様にも自分たちの商店まで来ていただいてお祭りをにぎわせてほしいという思いで奉賛会というのができました。ただ、歴史的な経緯はそうでありましたが、商店街も、今おっしゃったように人吉の商店街もだいぶくたびれていました。くたびれて、ここ数年は傍観者みたいな形だったんです。なかなか自分たちの、この祭りを利用して何かやろうという気運は正直言ってありませんでした。しかし、今年はだいぶ違って、この1200年祭を機に、商店街の若い方々が立ち上がってイベントをやろうということで、「KUMAKOIダンスバトル」というような大会を、商店街自らが先頭に立って誘致というか協力をして商店街でお祭りをやられました。結果的にそれがどう個々の商店に跳ね返ったかというのは、まだ統計が出ているわけではないのでわかりません

が。そういった形で、商店街自らがこの祭りを利用して活性化をしようということで動かれております。

それともう一つには、昨日市長が少し触れましたけれど、「人吉球磨は、ひなまつり」というようなイベントを商店街が自らやっています。これも5年ぐらいいになりますが、当時は、「そぎゃんイベントをしてもどうせ人は来んどもん。ひな人形見に来る人がおるやろか。」というような雰囲気でした。例えば、今は眼鏡屋さんや時計屋さん、靴屋さんの前に、こんにゃくとかお菓子とか売れる品物を飾られるようになりました。商店街自らが、「何とかここにお金を落としてもらおう」というような気運で努力をされています。特に若い人、女性、こういった人たちが協力をして、今お金が落ちるような仕組みづくりに頑張っているらしいです。それでも5年、私が知っている限り5年はかかっていますね、そういう気運になるのに。



コーディネーター ありがとうございます。もうお一方、前の方お願いします。

参加者 愛媛県の最南端愛南町から来ました大森と申します。福川さん、溝口さんの方に1点と、それから鶴嶋さんの方に1点ご質問させていただいたんですが、お話にもありましたように、1点目ですが、若い人をいかに引っ張り込むか、それから若い人がやることについて温かい目で見られるというふうに感じましたんですが、若い人そのものがかなり少なくなってきている。そういう状況の中で、外に出て行かれた若い人を、何か関係づけるとか、そういうような気持ちというか試みというか、そういうものは何か考えておられるでしょうか。

コーディネーター これが1点目のご質問ですね。2点目は。

参加者 2点目は鶴嶋さんの方にご質問させていただいたんですが、立派な復元事業をされて地域が誇るべき資源になったというふうなふうに思うん

ですが。これが観光資源ということだけで、「観光資源」といったときには当然地元の住民の方も活用されると思うんですけども、地元の方は1回見たらそれで満足というような形になりがちなところがあるんじゃないだろうか。地元の方は、本当に繰り返し、地元自体や地元の住民自体がリピーターとして人吉城跡に行かれるというような仕組み、それを何か考えられておられるのかどうかということです。

コーディネーター それでは、その2点でよろしゅうございますか。2点目の鶴嶋さんへのご質問からいきまして、順に溝口さんの方に戻っていきます。

鶴嶋 一番頭が痛いことをごさいますて、リピーターをどうするか。冒頭に話しました、人吉城歴史館のことでよろしいですね。

参加者 はい。

鶴嶋 催し物というか、私どもの施設の中には「特別展示室」という部屋があって、今日行かれればわかりますが、現在、「青井阿蘇神社の宝物展」というのをやっています。そうした特別展を随時開催するというのは、まず一つの手ですね。あとは、やっぱり私たち、当初の考え方としては子どもたちに足を運んでいただくことですね。一番まだ少ないですね。大人は来てもなかなか子どもたちは来ない。子どもたちにも来ていただくと、それを学校とタイアップしてやっていくという作業を、もっとやっていきたいと思っています。

それから、「人吉城歴史館カレッジ」というのを今年の夏に開催しました。8月に14回ほど夜にやったんですが、そういう学習会をもっと広範囲に、年齢を絞ってやっていきたいなあ、という考えもあります。それから観光的にはいろいろなツアー客、あるいは旅行会社に対していろんなプレゼンテーションをやりたいと思っています。今のところ考えているのは以上です。



コーディネーター それでは、溝口さん。

溝口 県外に出ている若い人たちにどう働きかけるかということは非常に大きなテーマだと思いますが、今、直接的に我々がアプローチしているというのはないんですが、私たちが今考えているのは、中学生、高校生、小学生は学校が1時間ぐらいでお祭りに参加できるようなシステムになってるんですね。中学校、高校じゃほとんど携われません。ですから、どっちかということと子どもの頃経験して、中が飛んで学校卒業して外に出て行くという形で、この地域の伝統文化に触れる機会が少ないので、やはり高校生、中学生を巻き込んだものを考えていかなきゃならないと思っています。10月9日に合わせて試験をやったりする学校もありますので、そういったところもちょっと改善していきたいなあというふうに思っています。

福川 「人が人を呼ぶ」というようなことがありまして、私が知っている人は限られている。ただ、彼が知っている人はいるというような形で、いろんな方がいろんな人を連れてくるということがあります。若い人ばかりじゃなくていいんですよ。年をとっておられる方でもいいし、女性の方や子どもでもいい。「1回祭りに入ってみらんね」というようなことをごさいます。「おくんちまつり先入観」というものがありまして、「おくんちまつりはにぎわんどもん。何じゃろもん、獅子面があるだけ。」「そういう先入観は取っ払って、まず来てください。そして自ら体験してください。」というようなことで、門戸は常に広く開けているところをごさいます。そして、初めて来た人でも法被を着て出られるようにしたいということで、自分で感じて、次の年からは出て来るような仕掛けをしていただいております。

例えば、いきなりこの獅子面をかぶせるわけじゃなくて、まずは獅子面のお世話をさせると。そしてお世話をしつづけて付いて回ったら、「来年はおら、あの獅子面をかぶってみろごたる。」というような気持ちになっていただくような、仕掛けとまではいきませんが、まあそれが順序でしょうけれども、そういった形で取り組んでいただいております。それから外の方に関しましては、今年の1200年のお祭りは、朝9時から夕方6時までインターネットテレビ中継をしていただきました。これは日本全国じゃなくて、世界各国に向かって配信をしていただいたので、その中でいろん

な方々から反響があったというようなことを聞いております。

また、人吉球磨を離れている人たちが、「おくんちの応援団」を結成していただいた。例えば、今年話をしてそうなるかといったらたぶん無理だと思います。去年も来ていただいた、一昨年も来ていただいた、「来年ということで来んですか」とか、そういうふうなことをしながら、これは自分たちが自分の生まれたところに何か協力したい、というようなことでやっていただいたんでしょけれども、おくんち応援団というものも作っていただいたり、また、「交流大学」というようなことを、お祭りを通じて日本全国から今日みたいに来ていただきます。そういったプログラムを組んでいただく団体ができまして、いろんなところからお呼びいただいて、それを例えばカメラを通して見るとか。1年目は、大学の先生が講師となられて全国からそういったことで募集しました。2年目は映画監督に講師としてお出でいただきまして、そういったことに興味ある方に全国から来ていただいて、おくんちまつりを自分のビデオで撮って、短編小説じゃないですけどもそういうものを撮って、明るる日にここで上映会をしたりとかそういうことをずっと積み重ねながら、今年の丸一日間をかけてのインターネット中継につながったんじゃないかなあということ、もっともっとこれは伸びてくるかなあというふうに思います。特に、私たちは祭りの中心におりますので、前から後ろまですべてを見ることができません。あとで、その映像とかこういうことがあったのかとか、こういう人たちがこういうことをやったのかということ、これを改めて知るといようなことで、これは年々、大々的になってこれからも増えていくと思います。

コーディネーター ありがとうございます。お約束の10時半を少し回ってしまいました。これでシンポジウムを閉めたいと思いますけれども、こういうシンポジウムには、今日ご参加の方々皆さんが、ご自分のご当地で地域づくりに携わっておられる方にまとめるしかないと思うんですけども、昨日、今日会場にお見えの山梨県北杜市の松永さんという方から、交流会の時にちょっとお会いいたしましてペンをいただきました。北杜市の市役所で作っているペンなんだそうです。これは市長さんのアイデアで、この横のところを引っ張りますとこんなふうに北杜市の日本一が3つ、日照時間が一番長い

からひまわり、それから水が多い、それから蝶々が多い。それから、裏側に地図、合併したまちですのでこういう合併したまちの地図が書いてあるんですね。昨日お話している中で、これをきっかけにして松永さんと仲良くなったんですけども。例えばこういうちょっとしたことで何かまちの宣伝ができますし、しかもこれが市長さんのアイデアと聞きましてびっくりしたんですよ。何か私も、こんなふうにちょっと、せっかく参加いたしましたので、こういうきっかけを外に向かっていろんなところで宣伝して行って、自分の郷里であります人吉がますます発展してくれば本当にうれしいなあと思っております。まとめになりませんが、本日のシンポジウムはこれで閉めたいと思います。お三方、鶴嶋さん、溝口さん、福川さんにどうぞ温かい拍手をお願いいたします。ありがとうございました。

司会 皆さん、ありがとうございます。いわゆる「官と民」からの歴史を紐解きながら、本日の大会テーマでございます、「ふるさとへ自信と誇りと愛情を」、少しおわかりいただけたかと存じます。それではこれから移動いたしまして、人吉城歴史館の方にまいります。鶴嶋専門員も同じマイクロバスで行かれますので、どうぞ尋ねたい方は車の中ですつかまえていただいて、いろいろお聞きになればと思います。

それではもう一度、皆様方、コーディネーター、パネリストに拍手をお願いいたします。

どうも今日は、ありがとうございます。